

弥五郎遺跡・古屋敷割遺跡現地説明会資料

令和7年10月18日(土)
公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

はじめに

国道253号上越三和道路は、上越魚沼地域振興快速道路(略称「上沼道」)の一部でその事業用地内には、下図のように12遺跡が存在します。

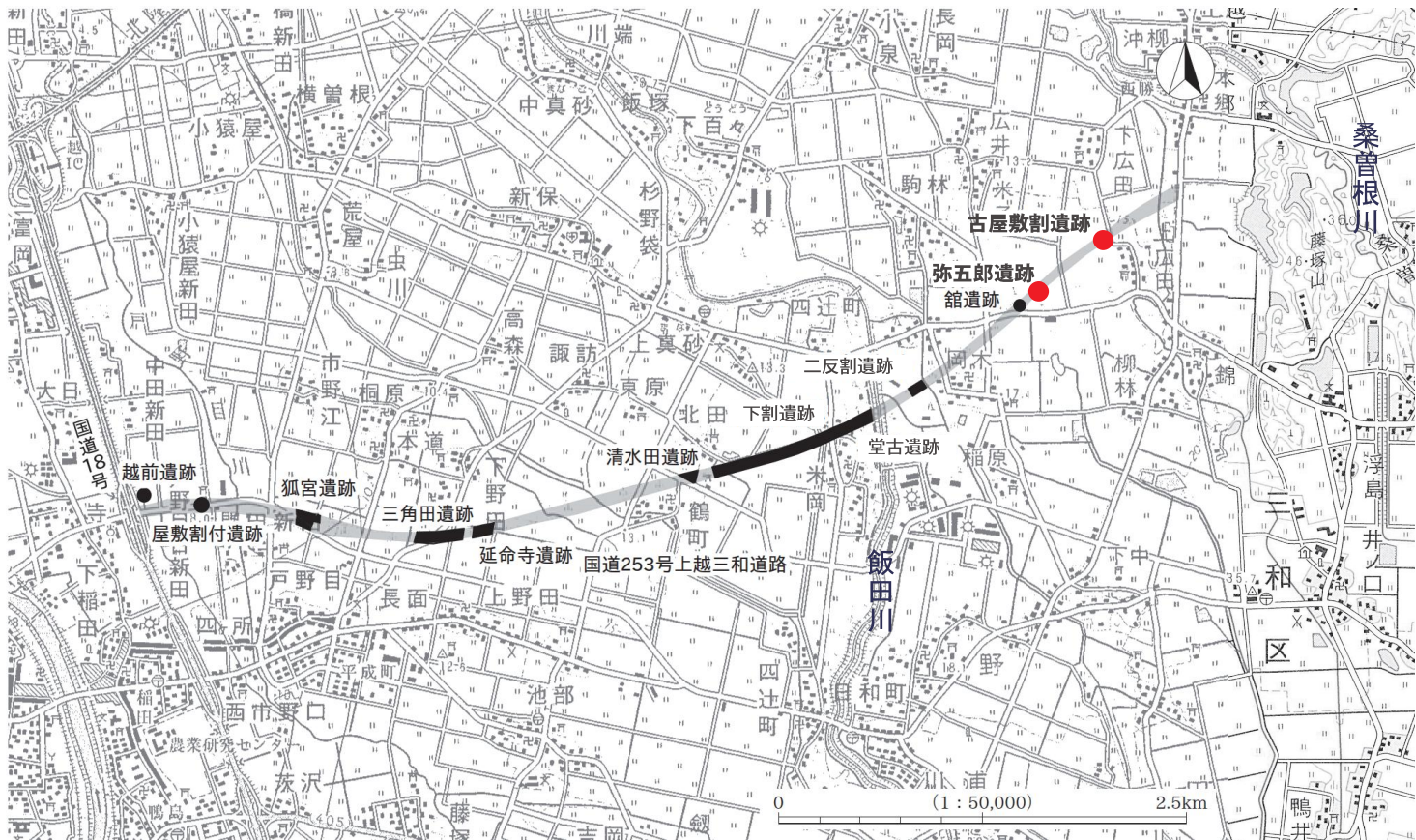
令和7(2025)年は、古屋敷割遺跡(第3次)、弥五郎遺跡(第3次)の調査を実施しました。いずれも水路部分を対象とした調査で、調査面積は弥五郎遺跡が924㎡、古屋敷割遺跡が1,981㎡です。



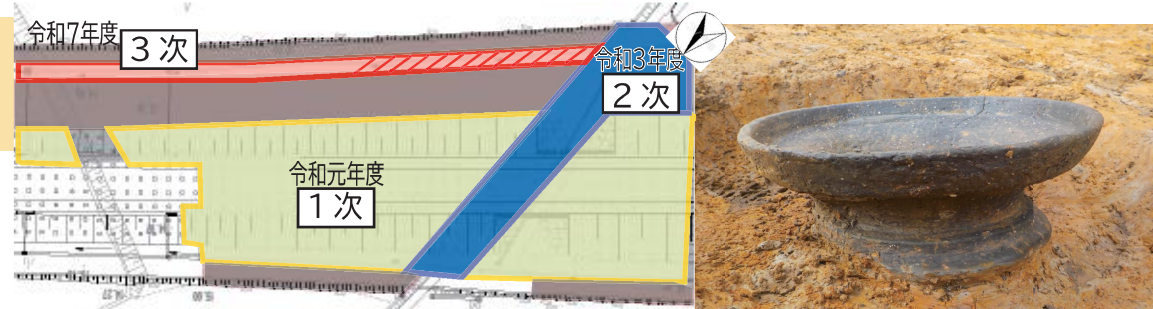
古屋敷遺跡第3時調査区・弥五郎遺跡第3次調査区(南西から)

1 弥五郎遺跡の概要

弥五郎遺跡は、上越市三和区に所在し、飯田川右岸の標高15～16mの沖積地に立地しています。周囲を米山山地や東頸城丘陵、西頸城山地に囲まれています。令和元年(2019)・令和3(2021)年度に調査が行われ、平安・古墳時代が主体の遺跡であることが分かっています。



上越三和道路と令和7年度調査遺跡の位置図 S=1/50,000
(国土地理院「高田東部」1:50,000 原図 2007年発行)



弥五郎遺跡第1～3次調査区範囲

第1次調査(下層)SI069 土師器壺

第1次調査(下層)SI097 管玉



第3次調査(上層)井戸(SE253)断面

第2次調査(上層)井戸(SE21-6)須恵器瓶

第2次調査(下層)自然流路(南西から)

2 第1・2次調査の成果

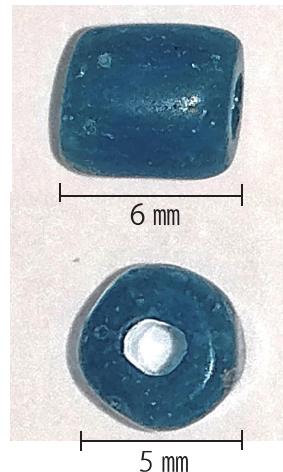
弥五郎遺跡は、上層で平安時代(約900年前)、下層で古墳時代(約1,700年前)の遺構・遺物を検出しています。

平安時代の遺構は、溝(SD)3条、ピット(P)6基、井戸(SE)2基、畑作溝1条などあります。古墳時代の遺構は、竪穴状遺構6基、溝1条、土坑(SK)19基、ピット31基、自然流路(SR)1条、遺物集中か所6か所、性格不明遺構(SX)29基を検出しています。このうち、自然流路は東西軸方向に長さ24.0m以上、幅14.0m以上、深さ1.7m以上の大規模なものが確認されました。遺物は平安時代の井戸から須恵器瓶、灰釉陶器小瓶の破片が出土しており、土師器・須恵器片も見つかっています。古墳時代では前期の土師器の甕・壺、土師器片と管玉、炭化米が出土しています。

3 第3次調査の成果

上層の平安時代の遺構は、井戸2基、溝3条、土坑1基、ピット2基を検出しました。下層の古墳時代は現在調査中ですが、今のところ溝2条、ピット1基、性格不明遺構2基を検出しています。また、調査区南西側には過年度調査区からつながる自然流路を確認しています。遺物については、平安時代の井戸(SE253)から有台碗や無台碗の破片が出土し、古墳時代の層からはガラス玉や土師器片などを確認しています。

これらのことから、平安時代の弥五郎遺跡は、隣接する館遺跡が集落(ムラ)の中心であり、ここは東端にあたると考えられます。また、古墳時代では不明瞭な遺構が多いですが、周辺遺跡と比較しながら今後の調査成果をふまえて検討していきます。



第3次調査(下層)ガラス玉

ふるやしきわり
古屋敷割遺跡（上層）

第1次調査範囲	鎌倉・室町時代の遺構
第2次調査範囲	平安時代の遺構
第3次調査範囲	古墳時代の遺構



SD1遺物出土状況



SR213ハソウ出土状況



風字硯

1 古屋敷割遺跡の概要

古屋敷割遺跡は上越市三和区上広田字古屋敷割に所在します。本遺跡は、保倉川の支流である桑曾根川と飯田川のほぼ中間に位置しており、沖積地の微高地上に立地しています。令和元(2019)年に第1次調査、令和2(2020)年に第2次調査が行われました。第3次調査となる今回の発掘調査では3つの調査区に分けて調査を行いました。

2 第1次・2次調査の成果

古屋敷割遺跡の遺構は大きく分けて平安時代から室町時代にかけての集落と、調査区全域に分布する古墳時代後期から室町時代にかけての用水路と考えられる溝群の2つがあります。

ほとんどの溝は灌漑のための用水路と考えられますが、調査区内に水田などは確認されておらず、用水の供給先はさらに海側(北側)にあるものと推測されます。

SD1より西側には、溝が多く建物などが見つかっていないことから、人々が住んでいたところではなく、主に畑等などの農用地であったと考えられます。SD1より東側では掘立柱建物(SB)4棟、土坑、井戸が合わせて30基以上見つかっています。このことから、SD1を境にして、西側に生産域、東側に生活域を築いていた集落の様子が伺えます。

遺物は、平安時代の土師器、須恵器のほかに灰釉陶器や風字硯などが出土しています。このうち風字硯は、墨をする面が左右二つに分かれた二面風字硯と思われます。また、古墳時代の須恵器ハソウなどがわずかに出土していますが遺構は見つかっていません。



SD62断面

3 第3次調査の成果

第3次調査では過年度調査で検出した溝群の延伸部分を含め、溝40条、井戸10基、土坑12基等が見つかりました。その多くは、第1次調査で検出された掘立柱建物の南側に密集して見つかっています。現在検討中ですが、検出したピットには柱痕跡が確認されるものもあり、掘立柱建物があったと考えられます。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器等が見つかり、集落の生活域が南に広がっていることが分かりました。

また、上層の調査中に遺構のサブトレンチから古墳時代の遺物がまとまって見つかりました。そのため、新たにサブトレンチを設定し、遺物の出土する範囲の追加調査を行いました。遺構は検出されませんでしたが、遺物の集中箇所が検出され、土師器の壺や甕、高杯等の遺物の他に炭や焼土が見つかりました。また炭の混じる土を洗浄したところ、約4mmほどの白玉が2点見つかりました。これらのことからこの場所で祭祀が行われていたと考えられます。

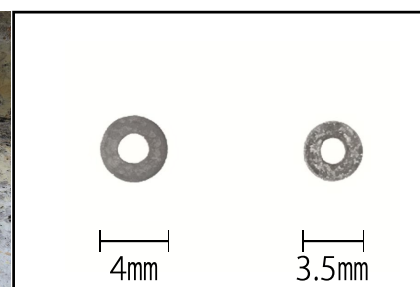
古屋敷割遺跡は断続的ながら平安時代から室町時代にかけて、大きく移動はせず、ほぼ同じ場所で集落が営まれていたようです。古墳時代の遺構は見つかっていませんが、遺物や祭祀跡からは調査区外に当時の集落が存在する可能性が考えられます。



密集する遺構群



SX440遺物出土状況



白玉(SX440から出土)



下層(古墳時代)調査範囲

下層遺物集中範囲(SX440)

第3次調査2区

第3次調査1区

未調査範囲

第3次調査3区